生涯学習情報誌

フォンズ

第 58 号
2011年 12月 10日
発　行
常陸太田市フォンズ・ネットワーク
事務局　常陸太田市生涯学習センター内
〒313-0061
茨城県常陸太田市中城町3280番地
TEL 0294(72)8888
FAX 0294(72)8880

辰の口堰（常陸大宮市）

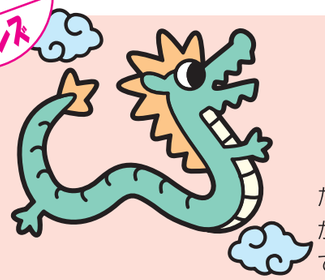
水の想い出 ㊼

今年の５月の大型連休、家の周りの風景はいつもの年と何かが違っていた。それもそのはず、いつもなら連休中の一大イベントである田植えが行われていなかったのだ。例年ならば連休前には上河合町から藤田町までの道路沿いの田んぼに水が張られ空を映し出す大きな湖みたいになり、田んぼ沿いの農道は田植えをする家族で大賑わいになる。今年は常陸大宮市の「辰ノ口堰」からの水路が３月の地震の影響で壊れてしまい、５月の田植えの時期には水が来なかったのだ。といっても市内の他の地域では例年通り田植えが行われていて風にそよぐ苗の姿を見る事ができたのだが、近所の田園風景が水のない田んぼだとやはり寂しい。おまけに通水の時期が５月下旬ということで田植えは６月上旬に行うことになり、苗を育てるのも一苦労。早く種モミをまきすぎて失敗したり、暑さで苗がうまく育たなくて失敗したりという話もよく聞いた。

そして待ちに待った５月下旬。遂に水路の修復が完了して用水路に水が戻ってきた。いつもの年なら見慣れた風景だが、今年はその当たり前の風景が特別に見えた。水が入った田んぼは美しくそこには生命が感じられた。６月に行う田植えは初めての経験だったが、心配していた苗も順調に育ってくれて10月には新米を頂くことができた。今年は自分をはじめ多くの人が様々な物の価値観を考えさせられた１年になったことだろう。

（萩谷　浩司）

フォンズとは、ラテン語で泉の意味です。とぎれることなく新鮮な情報がお届けできるようにと名付けられました。



常陸太田の龍・竜

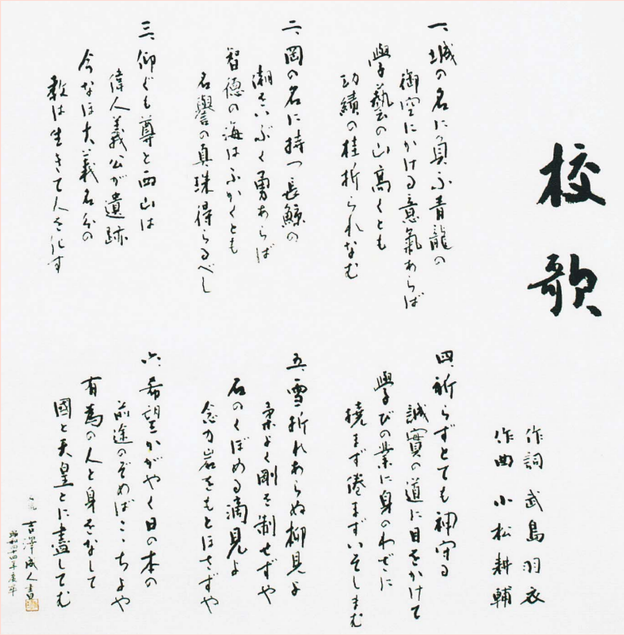
平成23年卯年も終えようとしています。今年は、とても悲しい出来事が起きた一年でした。全ての人たちが来年こそは、良い年にと願っているのではないかと思います。来年は辰年、辰は十二支の中では、唯一伝説の生きものの干支です。神様の化身、神の使い、聖獣とも呼ばれる龍・竜の年です。来年こそ良い年になることを願いながら、常陸太田の龍・竜を紹介します。　（高橋　靖治、萩谷　浩司、鴨志田　悟）

県立太田一高の校歌で歌われている「青龍」

太田一高の校歌冒頭に歌われている青龍城について，太田一高同窓会長でもある中村洋一さんは，次のように語っています。

「常陸国の大半を支配した佐竹氏の居城『太田城』は，古くから，舞鶴城・青龍城と呼ばれてきた。現在の市立太田小学校あたりに城の中心（本丸）があった。太田一高は江戸時代の古図には「北郭」とあり，最も北側の曲輪（くるわ）であった。その青龍とは，中国の神話に登場する四神のうち東を守護する聖獣である。佐竹氏発祥の地である馬坂（まさか）城（天神林町）より東方にある太田城を青龍城と呼んだのかも知れないが，その由来は明らかではない。」と。

このように青龍で始まる校歌には，その他にも太田の歴史と伝統がおりこまれてあり，現在も声高らかに歌い継がれています。



県立太田一高校歌（「益習の百年」より）

また，太田一高には青龍と名がついたものが他にもいくつかある。毎年発行され生徒全員に配布される「生徒会誌『青龍』」や，3年に一度開催される文化祭は「青龍祭」と呼ばれており、今年も震災復興の中，第29回青龍祭は盛大に生徒の手で開催されたそうです。

生徒会誌「青龍」

今年の「第29回青龍祭」の準備風景とそのポスター

「常陸青龍」

今や常陸太田市を代表するぶどうとなった「常陸青龍」。その「常陸青龍」の名前にも「青龍」の文字が使われていますが、その名前の由来について「常陸青龍」を育成した本多勇吉氏のお孫さんにあたる本多技研さんにお話を伺いました。

「常陸青龍」の「青龍」は、太田一高の歌詞にも出てくるように常陸太田市に昔からなじみのある名前だったのでその名前を使ったそうです。最初、品種登録する時に「青龍」で登録しようとしましたが、その名前はすでに使われていたため、「常陸」を付けて「常陸青龍」で登録することにしました。今は「常陸青龍」というと常陸太田のぶどうという地域品種のイメージが付いたためこの名前にして良かったと思っているそうです。

甘く、酸味・渋みが少ない「常陸青龍」

2月に行われたプレゼンテーション

現在、JAみずほ常陸太田ぶどう部会では「常陸青龍」のブランド化へ向けて、水戸市の文化デザイナー学院の生徒さんと共同でロゴマークの作成などを行っています。昨年の夏には実際に生徒さんが訪れて常陸太田のぶどうについて学び、今年の2月にはデザイン案のプレゼンテーションが行われました。さらに来年3月には商標登録用のデザインが決定するそうです。

絵画で観る常陸太田の龍・竜

龍（竜）は、神社仏閣の天井画や日本画の題材として数多く取り上げられてきました。市内の神社やお寺の天井等にも龍が描かれています。その中のいくつかの絵画を紹介します。

●諏訪神社（新宿町）の天井画

●梅津会館（西二町）の龍虎掛け軸

常陸太田生まれの画家・田所静年（江戸後期～明治）による天井画

●正宗寺（増井町）の龍雲図

●秋葉神社（西三町）の竜天井画

ダムの湖底に沈んだ幻の秘湯
―竜神峡元湯―

色鮮やかに紅葉が山々を彩り、大勢の人が訪れる竜神峡。その奥深い上流に、昔近隣の人々に愛された「元湯」「裏湯」という２軒の温泉宿があったことを、皆さんはご存知でしょうか。ダムの建設により移転を余儀なくされ、湖底へと消えてしまったその湯宿。今でも地元の人達に語り継がれている名湯の思い出を宿の御主人・井上芳宏（いのうえ よしひろ）さん（88歳）にお聞きしてきました。（菊池　幾子）

井上芳宏さん

現在の竜神ダムから2.7kmさかのぼったあたり、遊歩道から竜神ふるさと村に通じる急な階段のある対岸に、その宿はあったそうです。「元湯橋」という橋がかかり、人々が行き来をしていました。当時は今よりもずっと狭い遊歩道しかなく、宿までの行き帰りはとても大変だったそうですが、それでもそのお湯を求めて、日立・大宮・菅谷・山方など随分遠方からもお客様が毎年のように訪ねてこられたそうです。登山客も多く、中には山方から籠岩を越えてお湯に入りにくる方もあったそうです。一年のうち一番賑わうのは春先、３月の農作業にかかる前に、お湯につかって鋭気を養うため、そしてその２ヶ月後くらいに又、骨休めにこられる方が多かったようです。当時はほとんどの方が自炊をされたそうですが、それでも必要な物資を背負い、井上さんは朝と夕方、日に２度宿までの道を歩いて届けに行っていたそうです。「当時は、靴など無くわらじでしたからね、マムシが出たので怖かったですよ。」結婚された頃は県の職員として、県北地方の林業指導にあたっていた井上さん、宿の接客は奥様にまかせ宿舎に泊まり込みのことも多かったそうで、「夜、時間があるのでよく家内に手紙を書いていました。」―で、奥様からのご返事は？―「宿が忙しかったのでしょう、あまり来ませんでしたね。（笑）」

昔は竜神峡という呼び方はされず、もっぱら「竜神川のお湯」と呼ばれていましたが、いつしか「竜神峡」の呼び名が定着し宿の名も『竜神峡元湯』と改めたそうです。「竜神峡の名をつけて商売をしたのはウチが最初だと思いますよ。」

「ダム建設の話は、ずい分と昔からありました。実はダム建設の前に一度移転しているんです。元の場所から２km程下流にね。そこまでパイプをつないでお湯を引きました。それは大変な作業でしたよ。ところが旅館を新築してたった７年後に、ダムの位置が更に下流に決定してしまい、とうとう２度目の移転となってしまいました。家や山は代わりがあるけれど自然に湧くお湯の移転は無理ですからねェ。」その後、下高倉町に移転した「竜神峡元湯」は地元の人達の様々な集会の場所として、その役目は変わりましたが長く人々に愛され、３年前遂にその歴史に幕を閉じるまで続きました。

竜神川中流にあった竜神峡元湯（大正9年）（「水府村合併記念誌」より抜粋）

竜神伝説の残る竜神峡、その山ふところに抱かれて人々を癒し続けた自然の恵みも又、竜神からの贈り物だったのかも知れません。

「その場所へ行ってごらんなさい。今でも同じ場所でモレモレとお湯が湧き出ていると思いますよ。ただしダムの水の底ですがね。」

「瑞　龍」

合併前の常陸太田市で龍のついた地名といわれれば、真っ先に瑞龍の地名をあげる方が多いのではないでしょうか？この地が「瑞龍」と呼ばれるようになるまでを調べてみました。　（五十嵐　弘）

この瑞龍の地名を書物で確認できるのは明応２年（1493年）か３年頃とみられる「領地違乱書付写（りょうちいらんかきつけうつし）」にある「すいりう」が最も古いとされています。この地で佐竹氏と山入氏が文明３年（1471年）頃から衝突をくり返していましたが明応２年（1493年）に岩城氏の仲介で和議が成立しました。「領地違乱書付写」とは衝突をくり返していた時期の領地の奪い合いの調査書のようなものです。その後「寛永16年（1639年）３月16日卯ノ随留村宗旨改帳（ずいりゅうむら しゅうしあらためちょう）」写の表紙に随留村と村名に「随留」の字が宛てられています。元々の地名には「随留」の字が宛てられていたようです。この地名に至った理由には源義家の乗馬が突然駆けだしたが、この付近で留まった。義家の心に随い足を留めたことでこの地を「随留」と呼ぶようになったという言い伝えもあります。その後、水戸藩歴代の墓所が営まれました。墓所の造営中に、白蛇が現れたことから、これはとても「瑞兆」であるということから「瑞龍」に改めたという話も言い伝えられています。「瑞龍」という字句は当時の我が国の武家の間で、好まれて用いられていたようです。たとえば、尾張徳川家の始祖義直の院号「瑞龍院」、豊臣秀吉の姉瑞龍院妙恵が開基の滋賀県近江八幡市の「瑞龍寺」、加賀藩二代藩主前田利長の菩提寺「曹洞宗瑞龍寺」などです。

「龍」は神様の化身、神様の使い、聖なる獣とされていました。又、「瑞」には「めでたいしるし」「みずみずしく美しい」「吉兆」の意味があります。そんなことからも「瑞龍」がとてもめでたい字句として好んで使われたのではという説もあります

龍はどこに？

下の2枚の写真はいずれも「龍」をかたどったものです。さて、どこにあるでしょう？（答えは6ページ下段）

問1

問2

広告

ふるさとの伝承・暦③

季節の節目をいろどる伝承行事が今見直されつつあります。日々の生活の中にある地域性に富んだ風習、いにしえの暮らしや暦に結びついた神事などをご紹介します。

金　砂　祭（カナサマチ）

金砂祭は金砂さまの秋の例祭です。旧暦の11月12日が西金砂神社、13日が東金砂神社でしたが、現在は新暦の12月に行われています。昭和30年代までは大人も子どもも楽しんだ祭りのひとつでした。

「秋の仕事は金砂さまの前に終わらせるものだ」と言われ農作業に精を出す。「金砂まちだから、大根・白菜・綿・塩など白い物は使うな」「縫い物はするな」「金砂さまを背にして旅に出てはならない」「不浄なものにさわらない」「７日から16日までの金砂まちの間、仕事をすると神様の罰が当たって思いがけない災難に見舞われる」などと伝えられ、一切の仕事を休んで神詣でに専念する。この禁忌を守ることが自分たちに平穏無事をもたらすものだと考えられていました。　（鴨志田　弘子）

〈地域の方々から聞いた金砂祭のこと〉

- 学校は半日で終わり、早足で神社まで登っていった。
- お小遣いを貰い大町場（おおまちば）（ふるさと歴史民俗伝承館の隣）の出店へ行く。古本・漫画本を売っている店があって、楽しみにしていた。買った本は１年中眺めて楽しんだ。
- 農家の人が醤油箱に戸板を載せて、くし柿・ゆず・いもがら等の農産物を売っていた。
- あまたろう焼き、煮イカも売っていた。おもちゃ屋さんも出ていた、この辺には無かったから行ったね！
- 盛んな時には、西金砂には50軒くらいの出店が出ていた。太田・久慈浜・水戸・大宮・久米など地元で小商いをする商人が店を出していた。３日くらいかけて荷物を背負って歩いて上がった。少し金持ちの人は馬で上がった。やがて、地元で小商いをしている人が次第に減り、的屋（てきや）の出店がほとんどになってしまった。
- 天下野の宿には、たくさんの店が並び楽しみにしていた。赤い鳥居の所まで行くのに、大勢の人に囲まれ押されるように行った。

12/ 7　御注連（おしめ）はり…注連縄を各所にはり、旗をたてる
12/11　ヨイマチ……お供え餅の奉納、出店のみせびらき
12/12　ホンマチ（例祭）……西金砂神社　午前中秋例祭
　　ごちそう（赤飯や煮しめなど）を作り、祝い、神社へお詣りに行く
12/13　秋例祭……東金砂神社　午前中開催
12/13･14　十二合祭（じゅうにごうさい）……豊作･豊漁祈願の祭事が行われる
12/16　おまちばらい……旗を降ろし日常に戻る

お供え餅の奉納

十二合祭

西金砂神社の十二合祭

現在は12月13日から14日の真夜中に奉仕している。古くは旧暦11月13日から14日にかけて奉仕していた（月が南中する時間帯で燈火を使わないことを常としていた）。

当日夕刻、日立市水木浜講中の代参人が登山するのを待って潔斎後、御本殿より御旅所（現在は拝殿）へ御分霊が神幸する。その後、８時･10時･12時に、参詣人に時刻合図の号鼓を打つ。午前２時に祭典が始まる。十二合とは、鏡餅・柿・栗・梨・山芋・ところ芋の６品を各々２つの升に入れて神前に供えることからいう。

鏡餅は“純白清浄”、栗と柿は“くりくりとかきとる、金品が内へ入ること”、梨は“何もなしで無病息災”、山芋は“ねばり強く”、ところ芋は“所を得しめ、住所を定めるということ”を表している。こうして神に五穀の豊穣、浜大漁の祈願をする祭りである。

（西金砂神社宮司 中嶋　又実）

5ページクイズの答え

問１　新永久橋の欄干（水府地区　中染、天下野間）

問２　道路外灯の上の飾りです（写真は水府天下野地区）

百姓母ちゃん農日記 ③

もんぺ便り

『里山クリーンアップ大作戦』

落ち葉は日本人が太古から続けてきた優れた循環システムの中に位置し、土つくりに欠かせない最高の有機資源だ。それが今回の福島原発事故で放射性物質が降り注ぎ、山は汚染された。しかし、調べていくうちに汚染されたのは事故当時地表面にあった古い落ち葉で、今年落ちる落ち葉は大丈夫なことが分かってきた。そこで今年の秋が深まって新しい落ち葉が落ちる前に、汚染された落ち葉や枝などを運び出す一斉清掃を計画した。その「里山クリーンアップ大作戦」当日は、130名ものボランティアの方々が集まってくれた。私たちが一農業者として、やると決めたことに、大勢の人が関心を寄せてくれた。常陸太田の状況は福島ほどシビアな汚染状況ではない。だからこそここで生きていくために、できる限りの行動をしていこうと決めた。それがこの地が受けた放射能汚染と風評被害に立ち向かうことにつながる。

逃げるしかない福島の人もいる。農の道を閉ざされた人もいる。そんな中で茨城の山里の力を結集して、新たな風が吹くかもしれない。そんな予感とともに始めたことだったが、予想外に大勢のみなさんが参加してくださり、私たちにはその光景はまるで夢のようだった。野菜を届けている会員のママさん。お世話になっている地元の方々。ネットやツイッターで知り合った友人・知人。新聞をみて興味をもった方。県南・県北の百姓仲間。被災地支援をしているキリスト教会のメンバーさん。いろいろな方々が、熊手をもってせっせと落ち葉を集めて、山での時間を共に過ごしている光景はとても気持ちの良いものだった。落ち葉さらいが済んだすっきりした山をみて、山が喜んでいるようだねと感想を言い合って、笑ったひと時。農は理屈じゃなく、人を動かすものだと思った一日だった。

（布施　美木）

子育て奮闘記

踊るママパラダイス ㊼

ユースケが特別支援学校に通いだして１年半。あっという間にこの先の時間も駆け抜けてしまうのだろうと思います。

地元の中学校に入れたときは、何が何でも普通高校に入れようと躍起になっていた私ですが、色々なことを考えて専門の学校に通わせることにしました。ユースケのために有効な道を意識して大晦で熟考しました。今だから言えますが、決めたときは断腸の思いでした。当たり前の生活を送らせたいと願うことはわがままだろうかと何度も自問自答し、友達関係でつまずくユースケを見たとき、仕方がないと知りながら泣いたりしました。今思うと私はユースケの障がいを受け止め切れていなかったのでしょう。

ユースケの通っている学校は、生きるために必要なことをきちんと教えてくれます。明るく優しく、そして正しい厳しさをもって、愛情深く教えてくれます。今まで過ごした学校や幼稚園でも感じていた一人で育てているわけでは無いことを更に強く感じます。支えてくださった皆さまのおかげで、いい選択ができたことに感謝しています。

そう思いながらもユースケが自分の「障がい」についてどう理解しているか今更ながら知りたくて、ある日手伝いをしてくれている彼に普通の高校に行きたかったかと聞いてみたのです。彼の答えは「はい。」でした。「でも、」彼は洗濯物を干す手を休めずにつけ加えました。「僕は勉強もできないし、うまく喋れないし。今の学校に行くと働くための事を教えてくれるし。楽しいし。」

「そうだねえ、ユースケは手伝いをよくしてくれるし優しいし、学校でも頑張っていてえらいと思っているよ。」

彼が私の方を見て嬉しそうに笑っているのがわかりましたが、お母さん、洗濯したばかりのタオルで涙を拭くわけにはいかず、後ろを向いてしまいました。きっと真面目なユースケに叱られてしまいますから。

――わいわいネット　織田　裕子――

真面目すぎるのもどうかと…

リレーエッセイ「思い出の絵本」『おおきな おおきな おいも』 ～58～

（幡町　根本 佳津見）

この秋、２才の息子が「うわあ～」と嬉しい反応を見せてくれたのは、昨年「芽が出たら（子どもにとって）面白いかも」という理由で、人知れず保管しておいたおいもです。カゴの中で、ニョキニョキ芽が出て見事に育ち、調理する今年のおいものそばで堂々と自己主張する姿に、拍手と興味を示していました。おいもといえば、その表紙のインパクトと共に内容も子ども心をくすぐる『おおきな おおきな おいも』という作品があります。いつか、子どもと一緒に読みたいと願っていた大好きな絵本です。

物語はあおぞらようちえんの子ども達が楽しみにしていた、おいもほりが雨で延期になるところから始まります。雨に負けじとカッパ・長ぐつ・カサなど思いつく雨対策を唱えてみても、おいもほりは一週間待たなければなりません。子ども達は考えます。一日たつと、おいもってどうなるの？土の中で、むくっむくっむくっと大きくなって…一人、二人と手をつないでみても、イメージする大きさには追いつかない…。先生から紙と絵の具をもらって。さて、どのくらい大きなおいもを想像したのでしょう？

黒と白のシンプルな絵の中で、子ども達が描きだすおいものムラサキ色は鮮やかで印象的です。それは、子どもが持つ好奇心の大きさと想像力のひろがりに比例するように、先生もビックリのおいもを誕生させます。そして『おおきな おおきな おいも』は、先生や子ども達の言葉かけと遊びの中で色々なものに変身していくのですが…。

みなさんなら、どんなおいもの変身を想像しますか？楽しんでくださいね。

（次回は　大森町　白幡　正子さん）

ちょっとひといき「中国料理 龍門」

創業45年になる金井町の龍門は、コース料理から餃子まで何でもおいしいお店です。北風が吹く季節になると龍門の肉まんが食べたくなります。ミートボールがポンっと入ったような手作りの肉まんは、存在感たっぷりでアツアツのふわふわです。蒸すのに20～30分かかるので注文はお早めに。肉まんの他に、あんまんと高菜まんがあり、持ち帰りもできます。

（相原 早苗）

●TEL：72-6800　駐車場35台
●定 休 日：水曜（水曜日が祝日の場合は翌日）
●営業時間：11:00～21:30

ちょっとひといき 注文焼き&日替わりパンの店「ベーカリー ハナワ」

食パン350円･メロンパン130円･あんパン120円･チーズパン100円（写真奥から時計まわりに）

昨年12月20日、三才町にオープンしたパン屋さんをご紹介します。お店の名前は「ベーカリー ハナワ」。店主の自宅の一角を改装して営業している小さなパン屋さんです。4年前から機初公民館で店主が講師をしている「親子パン作り教室」に参加した子ども達の「お店はどこにあるのですか？」「パン屋さんを開いてください」等の声をきっかけにオープンしたと店主が話してくれました。

オープンの後押しをしてくれた子ども達やお客様に、美味しくて安全な商品を提供したく、小麦粉等の原材料は国内産（小麦粉は北海道産）を使い、膨張剤・保存料等は一切使用しないで毎日焼いているそうです。

（五十嵐　弘）

毎日あります	日替わりパン	注文品
チーズパン100円	レーズンパン100円（月・木）	甘食・カレーパン
あんパン120円	ウインナーパン110円（火・金）	くまさん食パン
食パン350円	メロンパン130円（水・土）	イギリスパン等

●TEL･FAX：72-2939（電話予約可）
●営業時間：11:00～17:00　●定 休 日：日曜・祝祭日

常陸太田の地名話 ～7～

竜黒磯（たつごろし）【水府地区東染町】

水府地区東染町から国道349号〈棚倉街道〉、賀美地区上深荻に抜けるトンネルを竜黒磯（たつごろし）トンネルという。トンネルができたときに、この地域の水府村東染小字竜黒磯からとったものである。元禄時代以前河内村であったときに、同じ村の町屋にも黒磯という字があることから、西河内上の黒磯を竜（辰）黒磯と称し、「タツクロイソ」がなまって「タツゴロシ」になったという。（里老話）小字竜黒磯は、もと西河内上であったが、町村合併の変遷を経て、現在は「河内西町」と称することになった。郵便局の配達は、西河内上村の名残で町屋局であり、郵便番号も311-0301である。

（石川　誠）